③普段の喫煙環境

近年、禁煙スペースの拡大、分煙の進展により、喫煙スペースが限定されてきているが、参加者の発言の中では、特に喫煙場所に困っているような様子は見られてなかった。職場での喫煙は基本的に分煙が進んでおり、社内で自由に喫煙できるという参加者は少数であった。また上司が喫煙者であるか、非喫煙者であるかも、職場における喫煙環境に影響を与えている様子がうかがえる。学生などは、大学構内など、比較的自由に喫煙が可能な様子がうかがわれた。ただ、授業中にはたばこが吸えないために、短い休憩時間に喫煙場所にかけつけているという発言もあった。

○授業の合間。喫煙スペースは（校内に）1か所で狭く、休み時間にはるばる隅まで行って喫煙する。それでも授業の間には必ず吸いに行く。クラスで半分は喫煙していて、休み時間に一斉に喫煙スペースに行くため、混んでいる。（20代男性、専門学校生）

○禁煙と書いていないところでは吸う。大学校舎内は禁煙だが、外は灰皿がどこにでもある。外に出てしまえば吸うには困らない。（20代男性、大学生）

○職場では、喫煙所は外にある。仕事中はお手洗い以外に抜けられない。お昼に吸うときがある。家に帰るときくらい。（20代女性、内勤）

○たばこ部屋（喫煙室）で普通に吸っている。男女共にばんばん吸っている。たばこを吸う相手なら、たばこ部屋で打ち合わせする。デスクにじっと座っている事はなく、社中を歩いているようなので、吸いにくいということはない。吸いたいから行きましょう、という感じ。会議室などは禁煙である。奥まったところに煙を吸ってくれる器械と、灰皿と自販機のある部屋がある。（30代女性、内勤）

○最近職場が禁煙になった。2か所くらいの喫煙ブースがある。みんな外へ出るとまずたばこを吸う。男性は、職場で半々くらい喫煙する。女性も昼食後、食堂で吸っている。外出先への移動中、マナーは悪いと思うが歩きながら吸うこともある。なお、銀行は（店舗が開く）朝9時までは吸って良い。夜8時以降もルールを侵して、なんとなくデスク上で吸っている。（30代男性、内勤）

○自社のデスクの上、車の中で喫煙する。商談のため外に出ている時間は長いが、そこでは吸えない。商談の移動までのちょっとした時間を利用して吸いだめをする。社内で、若い女性はオープンに吸うが、年配の人は陰で吸う。（30代男性、外勤）

○会社のリフレッシュルームで吸っている。そこに行くといろいろな話が聞ける。吸わない人は仲間に入りにくい。会社では吸う人、吸わない人半々。差別的な感じはない。肩身が狭いとは感じない。自宅では嫌われている。自室で吸っている。（40代男性、内勤）

○事務所は禁煙だが、吸わない上司が帰ると空き缶で吸っている。一応分煙スペースが設けられている。家で吸う時は換気扇の下。カーテンなどの汚れも違う。（40代男性、外勤）

ただし、喫煙の自由度は、男女で異なる状況も参加者の発言からうかがわれた。社内に特定の喫煙場所が設置されているとはいえ、「（喫煙場所へ）行く女性が限られていて、行きにくい」「女性が喫煙するのは良くないという考え方があって、男性喫煙者の中に加わりにくい」という発言もあり、女性喫煙者が特に肩身の狭い思いをしているという状況も見られた。

○喫煙スペースに雰囲気的に行けない。各フロアに喫煙所はあるが女性はいない。飲みに行くと吸うので、（自分が喫煙していることを）知っている人は知っている。外にわざわざ吸いに行くこともしない。そういう状況に慣れているので、（たばこが）なければないで大丈夫。（30代女性、内勤）
○デスクではいけないが、フロアーに喫煙テーブルがあり、吸っている人がいる。フロアーでは女性は吸いにくいのでは。女性は食堂で吸っていたりしている。（30代女性、内勤）
○各階に喫煙所があり、空気清浄機や灰皿をあける水がある。ただ女性は行きにくく、自分も行かない。吸いたい時はビル外の灰皿へ行く。もしかしたら他のフロアーには女性がいるかもしれないが、周りには見当たらない。（30代女性、内勤）

喫煙者であっても、自分の部屋にたばこの臭いがつくことを嫌い、自宅ではたばこを吸わないほか、特に女性では親の前では吸わないという発言もみられた。出張などで新幹線を利用することが多い参加者は、新幹線では「禁煙車を選択する」という回答もあった。密閉された空間での煙は、喫煙席を選択すると回答した参加者においても苦痛である場合があることを示唆している。

たばこを吸っていることで「肩身がせまい」と感じることがある一方、「喫煙スペースと定められている所で吸っている」「マナーを守っている」という発言も見られた。

④禁煙に対する関心度

禁煙については、「かつて試したが上手くいかなかった」という喫煙者が大半であり、禁煙補助剤などを試してみたという参加者もいた。禁煙の方法として、参加者から挙げられたのは、以下のような方法である。

○周囲に禁煙することを宣言する
（からかわれる、勧められてしまう、周りの誘惑で失敗）
○お茶や飴などで紛らわす。（我慢できず挫折）
○つきあっていた彼と一緒にやめる（彼が吸い始めて挫折）
○ガム、禁煙、節煙用のパイプなどを使う（気が付いたらガムを噛みながら吸っていた）
○「読むだけで禁煙できる」という本で（効果なし）

喫煙者が禁煙に積極的になれない理由として参加者が挙げていたのは、「禁煙すると太る」という理由で、特に20歳の男女は、禁煙によって太ることを強調する傾向が強かった。

喫煙歴が長く、また一日の喫煙本数も多い、40～50代の男性では、禁煙に対する欲求は強いものの、どの方法も不成功に終わっていることに対するあきらめもみられる。

○（喫煙を）やめようと思うができない。ニコチンガムもあったけど、ガムを噛みながらたばこを吸ってしまうと（ニコチンが）倍になる。処方箋を出してもらったことがあるが、半分でやめてしまった。（寿命の）残高も少ないから、喫煙を貫こうかなとも思う。（50代男性、16歳から喫煙、一日60本喫煙）
○禁煙は毎日したいと思っている。（禁煙は）1日しか持たない。ニコレットは買ってみた。48個入りで4,000円だけど、まだ4粒しか使っていない。会議中は禁煙なのでガムで代用している。（40代男性、20代後半から喫煙、一日20本喫煙）
○正月に「今年こそ（禁煙）」と思っているが、まわりから「貰いたばこ」してしまう。本数の調節は出来そうにない。喘息もちなので、やめたほうが良いのだが、発作のときも、苦しいけどやめられないという感覚がある。ニコチンガムも試そうと思ったけど、案外高いので手が出ない。（40代男性、中学生から喫煙、一日40～50本喫煙）

⑤喫煙の健康被害に対する認識

喫煙の健康被害については、どの参加者もまず「肺がん」という答えはすぐに出てくるものの、他の害についての認識はあまり高くなかった。参加者が挙げていた影響は以下の通りである。

○肺がん
○胃がん、舌がん
○脳血管関係、高血圧
○奇形・未熟児（出産の場合）
○喘息
○肺炎、肺結核
○上半身の病気

また、副流煙による受動喫煙についても認識はしており、「小さい子どもの方に煙が流れないように気をつける」という発言は、複数の参加者にあった。

ただし、自分自身がそれらの病気に罹患することになるリスクについての自覚はあまりなく、体調に対する影響は、「風邪をひいた時に喉がいたい」「心臓がバクバクする」など、一過性の影響の自覚にとどまっている。

女性は、胎児に対する影響についての多少の知識は持っており、禁煙したいという気持ちはみられる。だが、胎児への影響を喫煙による肺への影響と混乱している傾向もみられる。

○ちゃんとした子供を産みたい。子供に副流煙は吸わせたくない。(20代女性)
○出産の頃にはきれいな肺でいたい。肺がきれいになるまでに3年くらいはかかるから、それを逆算して今年か来年たばこをやめたい。(20代女性)
○子供への影響は心配である。子供を産む直前にはやめていたい。(20代女性)
○結婚を機に(喫煙を)やめようかなと思う。子供を産む3年前にはやめようかな。たばこをやめて5年経てば害がなくなるらしいが、3年くらいで子供への影響はなくなると聞いた。(30代女性)
○結婚が決まればやめようかなと思う。たばこをやめるきっかけになるかもしれない。実際にはわからない。(20代後半女性)

⑥たばこをめぐる消費行動の把握

たばこをめぐる消費行動を把握するため、1か月あたりのたばこ代、たばこ代に対する負担感、またたばこの代替財を把握する上で、趣味などに費やす金額についてもたずねた。1か月あたりのたばこ代は、おおよそ「一万円」と把握している。多くの参加者が、たばこを一箱ずつ購入しているため、たばこ代を負担に感じているという発言は少ない。「カートン買いをするとたばこの味が落ちるのでしない」という発言も聞かれ、「一箱買い」という買い方が、たばこに対する経済的な負担感をあまり感じさせない要因ともなっている。

○その時々に買っているので、負担感はない。一箱1,000円ならば考え方が変わるかもしれない。(20代前半女性、大学生)
○(1か月のたばこ代は)9,000円くらい。負担は考えたくないし、考えても吸うものは吸う(20代前半女性、大学生)。
○(1か月のたばこ代は)1万円。なんだかんだ言っても1日200円であり、まとめて出ていないので分からない。千円札で買うのはイヤだが、小銭で買っていれば負担はあまり感じない。(20代前半男性、大学生)
○一箱ごとに購入。カートンで見ると別物に感じる。体に悪そうに感じる。一箱ずつ、コインを入れて気分転換になる。(20代後半女性、内勤)
○(1か月のたばこ代は)1万円。長い期間吸っているので、必要経費である。お財布にお金はなくても、とりあえずたばこは買う。たばこ代は抑えず、昼食代を削ったり、飲みにいく回数を減らす。つまり、食費を減らす。昼食を食べる時間があまりなく、粗末なので、(たばこの費用との)バランスが取れているのかもしれない。(30代女性、内勤)
○一箱300円弱なので、それを削ったからといってどうにもならない。他のことにお金を使いたいことがあっても、たばこから減らそうとは思わない。(30代女性、内勤)
○たばこは一箱ごとに特定の値段なので、減らしにくい。食費の方が量を減らしやすい。吸うのは習慣である。(20代男性、学生)
○吸っている人は負担になるなんて考えていない。1日やめても300円なので、300円で何が買えるのかと思う。30歳になると持ち物は揃うし、食事もお弁当なので人より食費もかからないので、後は使いたいことに使うだけ。普段自分が何にお金を使っているかわからず、使い方に波がある。たばこよりお酒の方

が高いと思う。(30代女性、内勤)
○（1か月当りのたばこ代は）1万前後。でも感覚はない。カートンで買うと、高いなと思うが、日々の250円は何となく出ていく。財布が寂しいときは重い感じがするが、普段は感じない。缶ジュースと変わらない。(30代男性、内勤)
○（たばこ代は1か月に）2～3万、高いと思っている。(30代男性、外勤)
○たばこ代は意識しない。1日1箱。飲むともう1箱くらい吸う。1か月1万円程度か。まとめて買っていれば気になるかも。(30代男性、内勤)
○1年間に20数万円。妻がカートン買いしている。デパートの駐車場を無料にするためにカートンを買うことがある。年間の費用が車の維持費程度と思うと大きいけど。飲み代・タクシー代が一番大きい。昼は600円にする等工夫しているが、たばこ代は仕方がない。(50代男性、外勤)
○もしこづかい帳をつけていれば負担が大きいと思うだろうが、実際はあまり感じない。買うときは1～2箱単位。一日20本、250円と思うと大して感じない。(50代男性、内勤)

参加者にとって1か月に自由になるお金については、最高額で30万円～40万円とする女性フリーターや、2万円から4万円程度とする人まで幅が見られた。趣味等が、たばこの代替財となりうるという仮説のもとに、趣味についてもたずねたが、趣味にかける費用とたばこ代は関係ないとする意見が主流であった。

自由になるお金の多寡に関わらず、やりくりが苦しくなった場合の抑制対象としての見方は「食費」と同等であったり、あるいは20代の女性でコンタクトレンズの「溶剤」と形容したように、たばこは「生活必需品」という位置付けにあることが明らかになった。

○コンタクトの溶剤のようなもので、なくなったら買っている。たばこ代を減らす気はない。海外旅行に行ってたくさん買う時も、お得としか思わない。化粧品等免税品で買うのと同じ感覚である。(20代前半女性、大学生)
○食費のようなものである。たばこ代を減らす気はない。(20代前半女性、大学生)
○たばこは減らしようがない。これ以上あまり削りようがないが、(金銭的にどうしても苦しくなったら）やはり食事代を削ると思う。(40代男性、内勤)
○食費・たばこ代は同等だと思っている。外国に比べたら安い方。(50代男性、内勤)

経済学の理論上、たばこの価格弾力性は食品と近く、消費者の需要量は生活必需品に近いものであることを示しているが、実際に参加者の発言からもたばこが食べ物と同じ「生活必需品」に位置づけられることを示している。

⑦価格の上昇を伴うたばこをめぐる消費者の行動

「もしたばこが値上げされたら」という仮定のもとに、値上げされたらどうするかを聞いたところ、値上げされたら「やめる」という答えと同時に、「でも、結局吸っているような気がする」という矛盾した発言が多くみられた。

実際に値上げが行われた場合にどのような行動になるかは別にして、一定の値上げが行われた場合にたばこを「やめる」という発言は多くあった。このことから、経済学的には価格弾力性が小さいとされるたばこだが、値上げによる禁煙効果も期待できることがわかる。

○（300円になったら）一箱吸い尽くした時にやめようと思う。本数を減らすという意識はない。一箱買うか、やめるか。（20代前半男性、大学生）
○新聞で1本たばこ税が2円になるかもしれないとあった。それで値上がりしても吸うだろう。800円などになったら考える。320円なら抵抗あるが吸ってしまうと思う。500円ならば小銭で買える。減らすくらいならやめる。（20代男性、専門学校生）
○一食分（松屋の牛丼1食分 320 円）以上の値段になると、喫煙するより食事をした方が良いと思う。その時はたばこをやめて巻き煙草やパイプに挑戦したい。本当は巻きたばこや葉巻をやってみたいが、今の値段の手軽さに納得している。（20代前半男性、フリーター）
○ジリジリと値上げされれば、今と同じペースで吸うだろう。一気に 1,000 円なら違うが、ずるずると1,000円に値上げされれば吸うだろう。（30代女性、内勤）
○吸っている人はやめられないのがほとんどである。ちょっとずつ値上げしたのでは（喫煙は）減らないだろう。（30代女性、内勤）
○（一箱500円になったら、喫煙を）やめないだろうが、（たばこが）神々しく見えるようになるだろう。一本一本の重みが増す。最近値段を感じてしまう価格になってきている。（30代男性、内勤）
○一箱 900 円くらいになったら（もらいたばこで、人に一度たばこをあげても、後から）たばこを返してもらうかも。（50代男性、内勤）
○いくら上がっても受け入れると思う。300円になると抵抗感がある。たぶん安いたばこに銘柄を変える。（40代男性、内勤）

たばこの価格は、単なる価格だけではなく、コインで買ってお釣が出ない価格など、買う際の手間によっても心理的に異なることが明らかになった。同じ金額のたばこを購入する際も、コインで買うときは心理的抵抗感がないのに、「紙幣（1000 円札）になると損をした」、あるいは「高いような気がしてしまう」という意見が複数でた。現在280円のたばこを購入している参加者にとっては、1000円で3個買えなくなることへの抵抗感もあると思われる。また、310 円といった価格ならば350円の方が「素直な気がする」など単に、絶対的な価格が重要なのではなく、心理的な感覚も重要であることが明らかである。また釣り銭が多くなるのは嫌だという心理も見られた。また、前節でも触れたように、一食分の値段との比較で価格評価を考える意見も出された。牛丼一杯分の値段（280 円～290 円）を超えると困るといった意見もある。これは、若年層だけでなく、おこづかいに昼食代が重要な位置をしめる就業男性でも見られた意見である。

なお、一箱1,000円という値段の設定については、海外のたばこの価格の情報、

特に世界的にも高いとされる英国のたばこの例をあげ、「あり得ない」という反応が多かった。

⑧喫煙のコストとたばこ税について

喫煙のコストについての喫煙者の考えを聞くため、生命保険料に差があることについての考えを聞いた。この結果、おおむね「当然」「健康に悪いのはわかっているので仕方ない」といった意見が多かったが、若年層においては、実際に自分が保険料を支払っていないので実感がわかないという意見が多かった。

また、たばこ税の医療関係費用への目的税化については、おおむね賛成、または「仕方ない」とする参加者が多かったが、若年女性においては、政治家や行政に対する不信感が大きく、「どうせ医療には使われない」としつつ、「一個人ではどうしようもない」など「あきらめ」の雰囲気が支配的であった。

また、課税対象として嗜好品が狙われるのは仕方ないという意見も若年層で見られた一方で、就業男性などでは「コーヒー」など他にも嗜好品はある、課税対象としてたばこが最優先とは限らないのではないか、といった意見も出された。就業男性や壮年期男性においては、税そのものの議論をすべきとの意見が多く、納税者意識が強く反映されているようだ。「特定財源になるとタカリの構造ができるのではないか」という意見も出された。

⑨禁煙対策に対する考え

最近のメーカーによる自主的な禁煙対策についての考えについて、新聞などで取り上げられているたばこの自動販売機でのIDカードの導入について質問した。参加者が全て成人だったこともあり、否定的な意見は少なかったが、「未成年の喫煙者が減るかどうかは疑問」とする声も聞かれた。

3．非喫煙者に対する調査

以下では、非喫煙者に対する調査項目と得られた結果について記述する。

(1) 非喫煙者に対する調査項目と質問の目的

非喫煙者に対する調査項目とそれぞれの目的は以下の表の通りである。

非喫煙者に対する調査項目と目的

調　査　項　目
①参加者のプロフィール 名前／年齢／居住地／職業 自身の喫煙経験／喫煙をしない理由／たばこに由来する病気の認識度
②家庭の喫煙環境 家族の中に喫煙者の有無／自宅での喫煙の許容の有無
③（家族に喫煙者がいる人に対して）たばこ代と家計の関係 たばこ代の家計における位置づけ／家計への負担度
④周囲の喫煙環境 周囲の喫煙者の有無／周囲の喫煙者についての考え
⑤周囲の喫煙者に対する対応 周囲の喫煙者に対する対応／喫煙者の反応
⑥喫煙のコストについての認識 たばこについて不快に思うこと／たばこで具体的な被害／受動喫煙について
⑦公共の場についての分煙について 公共の場の分煙状況について
⑧禁煙対策について たばこのCMが自粛の認識状況／広告やCMの影響
⑨たばこに関する教育 たばこに関する教育などを受ける機会 ／若年層の喫煙について
⑩たばこによる被害 たばこのせいで損をしていること
⑪ たばこによるコストの負担について 生命保険などで、喫煙者と非喫煙者で保険料が違うことについて
⑫たばこ税について たばこ税の認知度／たばこ税を目的税化することについて

①参加者のプロフィール：名前／年齢／居住地／職業自身の喫煙経験／喫煙をしない理由／たばこに由来する病気の認知度

参加者のプロフィールを把握することを目的とした質問。特に喫煙をやめた人について、やめた理由などを把握する。

②家庭の喫煙の環境：家族の中に喫煙者の有無／自宅での喫煙の許容の有無

家庭の中の喫煙者の有無と、喫煙を家庭内で許容しているかどうかを把握する。

③（家族に喫煙者がいる人に対して）たばこ代と家計の関係：たばこ代の家計における位置づけ／家計への負担度

特に女性の参加者について、家計から家族の喫煙者のたばこ代が出ているかどうかを把握する。また、たばこ代についての負担間を把握する。

④周囲の喫煙環境（家庭外）：周囲の喫煙者の有無／周囲の喫煙者についての考え

家庭の外（職場など）における他の喫煙者の有無を把握する。

⑤周囲の喫煙者に対する対応：周囲の喫煙者に対する対応／喫煙者の反応

周囲の喫煙者の喫煙にどのように対応したかについても把握する。

⑥喫煙のコストについての認識：たばこについて不快に思うこと／たばこで具体的な被害／受動喫煙について

たばこについて不快に感じることなどを具体的に把握する。特に、喫煙による「不快感」は、喫煙のコストのうち Intangible（無形）コストに該当するため、なるべく詳細に把握する。また、受動喫煙についても、周囲からの副流煙を吸いこむことによる影響についての認識度も把握する。

⑦公共の場についての分煙について：公共の場の分煙状況について

公共の場での分煙状況についてと、分煙状況をどのように評価しているかについて把握する。

⑧禁煙対策について：たばこの CM が自粛の認識状況／広告や CM の影響

たばこ業界による CM の自粛などの認識状況や評価についての意見を把握する。

⑨たばこに関する教育：たばこに関する教育などを受ける機会 ／若年層の喫煙について

たばこに関する教育についての考え、特に自身が非喫煙者であることと、教育の効果について把握する。

⑩たばこによる被害：たばこのせいで損をしていること

たばこのせいで社会的に損をしていると感じること、特に Intangible（無形）コストに含まれるものを把握する。

⑪ たばこによるコストの負担について：生命保険などで、喫煙者と非喫煙者で保険料が違うことについて

喫煙者と非喫煙者の間の金銭的な負担感についての平等感について把握する。

⑫たばこ税について：たばこ税の認知度／たばこ税を目的税化することについて

たばこ税の目的税化について、非喫煙者としての意見を把握する。

(2) 調査結果

①自分の喫煙経験

男女合わせて９名の非喫煙者のうち、過去に喫煙経験があったのは女性２名、男性３名だった。男性３名のうち１名は10年間程度の喫煙経験があるというものの、それほど多くの量ではなかった。また、他の２名も「いいと思わなかった」「おいしいと思わなかった」という発言があった。

喫煙経験がある女２名は、ある程度の喫煙経験があったが、それぞれ「風邪をひいた後」「周囲が吸わなくなって」やめたということだった。

○15年前まで吸っていて、その時点で10年の喫煙歴があった。ものすごい風邪をひいて１週間禁煙した後、また吸ったらおいしくなかったし、欲しいとも思わなくなった。何の苦労もなく、結果として禁煙してしまったという感じ。喫煙していたときは自分なりのリラックスするための手段だったので、やめようとは思わなかった。（40代女性）

○喫煙は学生時代、父に教わって始めた。ショートピース、やがてロングピースから喫煙を始めた。学生時代は友人も吸っていたが、その後夫をはじめ周りが吸わない人達ばかりになったので肩身の狭い思いをしていた。たばこ吸う女なんてよくない、と言われるようになってやめた。一方、父（医者）はやめてストレスを感じるよりは吸うほうがいいと言っていたが、心臓発作で倒れてやめた。（40代女性）

②喫煙者への全般的な姿勢

喫煙者への姿勢は必ずしも批判的なものばかりではなかった。基本的に非喫煙者のカテゴリーは、喫煙絶対反対派と、条件付き容認派に分かれると見ることが可能だろう。

マナーや見た目の清潔感などに対する要望が出されるものの、基本的に「吸う側」の立場も尊重する、あるいは、消極的にではあるが受け入れるという意見が男女双方で見られた。

③家庭内・職場での喫煙

家族に喫煙者がいると回答した参加者は、特に女性の参加者に多く見られた（つまり夫が喫煙者であるケース）。また男性の非喫煙者の場合は、職場での喫煙者がもっとも身近な喫煙者であるといえる。喫煙者を家族にもつ非喫煙者女性に、たばこ代の管理について聞いたところ、関知しているとの回答はなかった。

家庭内で喫煙場所は規制している様子であったが、ルールとして厳しく決められているというよりは、吸わない側が「いやがる」ことで、喫煙者が気を使うという構造があるように見受けられる。

○（家庭内の喫煙について）特に何も言っていないが、夫自ら換気扇の下で吸っている。逆に換気扇が汚れて嫌だと思う。ただし、自分の仕事部屋（空気がこもる）では吸わないでくれと頼んである。夫はやめたいと思っていない。（40代女性）
○最近、上の娘は換気扇の下で吸ったり、空気清浄器を使ったりして、多少気を使っているようだ。その一方で、夫は当然のように吸っている。（50代女性）
○自分が車に酔うので車の中では吸わないこと、ふとんや衣類に臭いがつくのが嫌なので煙が広がらない寝室のドアは閉めることを取り決めているが、結局夫は換気扇の下で吸っている。夫は意志が弱いのでやめたいと思ったことがないらしい。吸い殻をシンクの角に捨てるのはやめてほしい。捨てるのは夜の場合出火を恐れてだと思う。それからトイレの中で吸うのが気になる。しかし、あまり文句を言うのもかわいそうだと思う。（40代女性）
○たばこをお金に換算したらどうなるかという発想は持っていない。ただし、娘には体に悪いのでやめてほしいと思う。だが、私が言ってやめるわけではない。自分で気づいてやめてほしい。（50代女性）
○夫がカートン単位で買っている。たばこを吸うことが夫にとってほっとする一時なので、それくらい認めなければと思う。本数を減らした方がいいとは言うが、そのこと（本数を減らすこと）によって夫がほっとしているなら構わないので、いくら使っているかどうかは気にしない。夫のこづかいの中でやりくりしていることなので、関知しない。（40代女性）

職場では喫煙のルールを定め、分煙を進めていることが明らかになった。しかし、終業時間後などにルール違反をしている者がいるといった指摘があり、喫煙者より厳しい視点がみられる。また、周囲の人に対して喫煙をやめて欲しいということを伝えることについて男性は女性に比べやや消極的な印象もある。職場では上司との関係などで言いにくいというのがその理由である。

特に男性非喫煙者の１名は、職場で喫煙されることによって目の不調があるということであったが、職場での人間関係もあり、言い出しにくいということであった。

④公共の場での喫煙

新幹線等、喫煙車両がある場合は、全員が禁煙車を選択している。しかし、車内を移動する際に喫煙車両を通過せねばならない場合など、喫煙車両の煙の濃度が非常に高く、それが不快であるという意見も出された。

○喫煙席は耐えられない。喫煙席に座るくらいならば行かない。子どもにすごく悪いと思う。喫煙席は避けられる限り避ける。電車を一本遅らせても避ける。（40代女性）
○（電車内等）最近分煙が進んでいて、喫煙席の煙の密度が以前より濃くなって通るのが大変である。駅の喫煙コーナーも、水につけたたばこの臭い等が充満して大変。（40代女性）
○先日、禁煙車が満席だったので、久しぶりに喫煙席に座った。新幹線の予約は、やはり禁煙席から埋まっていくようだ。最初は人があまりいなかったので気にならなかったが、途中から空気がかすんだり、たばこの臭いが衣類についたりして、大変不快だった。こういう時は、かえって自分が吸ったほうが良いのではないかとさえ思ってしまう。自分が吸っている臭いはストレスではないが、他人の臭いは嫌だ。（40代女性）
○（レストランなどでは）禁煙席を利用する。それでも結局、かなり煙がくる。店に入ったときにルーバーを見て風の流れを知る。日当たりの良い店だと、煙が見えるので、禁煙席に案内されても煙の来ない方に行きたいと店の人に言ってしまう。（30代男性）
○（レストランなどで喫煙席にいくか、禁煙席に行くかは）同行者次第。一緒に吸うところに行っても気にならない。（50代男性）

女性から多く挙げられた意見としては、タクシーのたばこの臭いが非常に不快であるというものであった。また、たばこの煙の混じったクーラーの空気も同様に不快なものとして指摘されている。喫煙者があまり気づいていない点であるといえる。

駅のホームにおける喫煙スペースについては、そもそも通行人にとって「危険」という意見や、喫煙スペース周辺が非常に汚い、風向きによっては意味がない等の意見が出された。

非喫煙者からの意見として多かったものの１つはマナーであった。女性の喫煙についても格好が悪い等の意見が出されていたが、男性も含め、ポイ捨てをしないなどの基本的なマナーの問題を指摘する声があった。逆に「きれいに吸ってくれば問題ない」という意見も男性、女性双方から出ていた。

⑤たばこ被害について

街を歩く子供の顔の近くに火種が近づくことへの恐怖感や、副流煙への危惧が指摘された。間接的な被害ではあるが、子供や妊婦がいるために「たばこをやめてほしい」と言うことが、相手との関係において「ばつ」の悪さを感じさせるというような状況も指摘された。

具体的なたばこの被害として、服へのにおいの付着、街中でのたばこの火の衣服への付着などが挙げられたが、社会全体への被害という点では、街の景観をゴミで汚しているという指摘が目立った。特に、街路におけるたばこの吸い殻は、

清掃の負担を大きくしているだけでなく、社会全体のモラルを低下させる可能性があるとの指摘もあった。

喫煙者が他者への健康への被害を中心に考えているのに対し、非喫煙者の関心は、単に煙の問題ではなく社会全体への損害をとらえている点で喫煙者とは異なっていると言える。

○ビルの火災予防は非常に大変。事故が起こらないように、清掃員が朝晩、特に晩、吸いがらの取り残しのないようにしている。定期的な消防署の査察で、山盛りの吸い殻を消防官に見つけられ、防火責任者がすぐに注意されたことがある。法にひっかかるので、たばこ一本の不始末が大変なことになる。いったん火事になると火のまわりが早い。(30代男性)
○厚生労働省や消防庁、管轄がそれぞれ違うので実態がよく分からないが、色々な面でかなりコストがかかっているはず。例えば、ディズニーランドではゴミが捨てられるとその場で職員が拾うようになっているが、相当費用がかかっているだろう。トータルでどのくらいかかっているか、合計を出すべき。本来JTがネガティブコストとメリットの算出をやればよいだろう。(50代男性)
○建築現場を見るとき、吸い殻が落ちているかどうか見るのはポイントであり、バロメーターになる。落ちていないときちんと管理されているということになる。一番心配なのは事故なので、吸い殻が落ちていないのは気が引き締まっている証拠。(50代男性)
○清掃員等の雇用を生んでいる面もある。(30代男性)

⑥たばこ税について

税金については、おおむね賛成という声が大きかったといえる。800円～1,000円、あるいは倍にして喫煙量を半分にするという設定を具体的に提示する参加者もあった。

ただし、税金の使い道については、課税側の問題点についても指摘が見られた。自動車税のように7つもの目的税を課し、無駄に使っているといった現状を批判する声もあった。この点は、喫煙者、非喫煙者を問わず指摘があったものであり、喫煙の害とは別の問題として考えられているようだ。したがって、課税そのものについて賛成であっても、課税する側の姿勢や、禁煙せよといいながら税収を見込んでいることに対する矛盾を指摘する声も見られた。また、男女共通して、グループインタビュー実施時期に、たばこ税と共に話題になっていた発泡酒に対して課税することについては反対の声があった。

たばこ農家の雇用の問題などもあるため段階的に値上げするほうがよいとの意見も見られた。雇用の問題への配慮や、税収目当ての増税に対する矛盾など、無条件で課税を認める土壌があるわけではないことがうかがわれる。

税金を用いて分煙設備を設置することについても、目くじらをたてる必要はないなどの意見がだされ、単純に喫煙者＝悪、課税者＝善という単純な発想ではなく喫煙者と禁煙者が共存できるマナーや環境を作ることを指摘する声が大きかったと見ることも可能であろう。

⑦子供への禁煙教育・青少年対策

なるべく若いうちから禁煙のプログラムを用いで教育していくべきであるという意見が出された。薬物禁止などの教育プログラムはあるが、たばこのプログラムは見られないことが指摘された。

しかし、大人がたばこを吸いながら、子供には吸ってはいけないと教育する状況では、十分な教育はできないとの指摘もあった。単にたばこの害悪を教えるのではなく、「他人に迷惑をかけないと観点から、どのような対応を取るべきなのかもう少し総合的に考えて欲しい」という異なる視点からの問題提起もあった。

購入時に ID カードを提示する仕組みの導入については、ヤミ業者の発生を危惧する声も出た。未成年者喫煙対策として有効性があるのか疑問の残るところである。自動販売機そのものを廃止すべきであるという根本的な指摘も見られた。

4．グループインタビューで得られた結果のまとめと今後の検討課題

以下では、グループインタビューで得られた結果を、まとめると同時に、次節のアンケート調査などで検討すべき課題について述べる。

(1) 喫煙者に対する調査結果

①喫煙開始は未成年から。きっかけは周囲からの影響。

グループインタビューの参加者の発言からみる限り、多くの人が喫煙を10代の後半の未成年から開始していることがわかる。また、きっかけとなっているのは、友人や親などの喫煙行動であることが明らかになった。

②禁煙は消極的には試したが、成功していない。

禁煙には、お茶や飴などで紛らわす等の消極的な方法で試してはいるものの、成功していない。年齢が高い喫煙者は、禁煙すること自体をあきらめている様子もあるが、若い女性は子どもを産む前にはやめたいという意識も持っている。

③たばこは一箱ずつ購入。そのため、たばこの経済的な負担感は感じない。

多くの人がたばこは一箱ずつ購入している。そのため、1回300円弱の出費という認識であり、あまり負担感は感じていない。一月あたりの出費で考えても1万円程度であれば、他のことではすぐ使ってしまう金額なので、負担に感じていないという意見が多い。ただし、たばこの値段に対する値ごろ感は、吸っているたばこの銘柄によって、価格が異なることもあるので、さらにアンケートで検証が必要と思われる。

④許される値上げは300～500円まで。

値上げの許容範囲としてあげられている価格は「300円」「500円」という金額である。「ずるずると値上げされたら吸い続けるだろう」としながらも、「300円」「500円」に達すると「やめる」という発言が目立った。実際に値上げが行われた場合の行動は別として、ある程度の金額に達するとやめるということから、禁煙対策としてのたばこの値上げはそれなりの効果が見込めると考えられる。

500円以上の価格、特に「1,000円」に対しては、海外のたばこの価格などから判断して、「あり得ない」と考えている参加者が多かった。値上げの幅と、一定価格に達した場合の行動変容は、喫煙者ごとに異なると考えられることから、この部分はさらに検証が必要であると思われる。また、どのような変数が、行動変容を説明できるのかについてもさらに検証が必要である。

⑤たばこの代替財は食事

参加者の多くは、たばこを「食べ物」のようになくてはならない物と考えており、たばこ代が足りなくなったら、「食費を削る」という発言が多かった。

⑥男女で異なる喫煙環境

総じて、喫煙スペースでたばこが吸えることによって、喫煙場所にはあまり不自由していないという発言が多かったが、会社に勤める女性の場合には、男性が多くを占める喫煙スペースに加わりにくいという発言もあった。

⑦目的税は許容するものの、使いみちに懐疑的

たばこ税の目的税化について、目的税そのものには特に反対する発言はなかったものの、税金の使いみちについては、懐疑的な発言が多かった。インタビューを行った時期に、話題になっていたニュースなどの影響もあると考えられる。

(2) 非喫煙者に対する調査結果

①喫煙者への姿勢は、許容と絶対反対に分離

非喫煙者の中では、マナーを守る等の条件で喫煙を許容する発言と、絶対に反対という発言の二つがみられた。喫煙者が同行する場合に、喫煙席に座るという人も中にはいた。

②家庭での喫煙に一定のルール。たばこ代には関知しない姿勢。

家庭の喫煙には、換気扇の下で吸ったり、空気清浄機の前で吸ったりするという一定のルールをもうけている。配偶者のたばこ代は、特に関知していない場合が多い。

③たばこの被害は、におい、街でのポイ捨て

非喫煙者がたばこの被害としてあげているのは、衣服や髪の毛へのたばこのにおいの付着、吸い殻のポイ捨てによる景観の汚れ、社会のモラルの低下などがあげられていた。さらに、吸い殻による火災を防止するための費用についても指摘があった。

これらのたばこの被害は、数値として推計することは困難だが、今後考慮していく必要はある。

第３節　喫煙者の喫煙・購買行動の分析

本章では、アンケート調査の結果に基づき、喫煙者の喫煙状況及び、価格変動に対する喫煙行動の変化について分析を行う。アンケートの実施概要は以下の通りである。

１．アンケート実施概要

(1) 調査目的

喫煙者のたばこ購入の実態把握を行い、たばこの価格が変動したという仮定のもとでの喫煙行動を明らかにし、喫煙対策のための基礎資料とする。

(2) 調査対象

株式会社 食品流通情報センターのモニターより、2,420 人を抽出することとした。20 歳以上の男女年齢別の喫煙率を反映させて、以下のように、男女年齢別に抽出予定とした。ただし、モニターを活用した調査の性質上、発送を了解いただいた上で、発送したため、下記のような男女年齢別の発送数となった。

図表4-3-1　男女年齢別の抽出予定数

	喫煙率 (A)			実人口 (B)		
年齢	総数	男性	女性	総数	男性	女性
20-29 歳	30.8	56.3	16.0	17,791,100	9,060,900	8,730,200
30-39 歳	31.8	58.1	14.9	16,696,300	8,407,400	8,288,900
40-49 歳	32.1	57.7	14.2	16,763,400	8,363,300	8,400,000
50-59 歳	26.9	52.9	8.3	19,357,000	9,579,100	9,777,900
60-69 歳	22.8	42.1	7.9	15,074,100	7,191,600	7,882,500

	推計喫煙人口 (C)＝ (A) × (B)			(D) 抽出予定数		
年齢	総数	男性	女性	総数	男性	女性
20-29 歳	5,479,659	5,101,287	1,396,832	560	428	133
30-39 歳	5,309,423	4,884,699	1,235,046	527	409	117
40-49 歳	5,381,051	4,825,624	1,192,800	518	404	113
50-59 歳	5,207,033	5,067,344	811,566	502	425	77
60-69 歳	3,436,895	3,027,664	622,718	313	254	59

(D) 男性 1920、女性 500 サンプルを(C)の比率で配分

年齢	発送数（総数）	発送数（男性）	発送数（女性）
20-29 歳	540	422	118
30-39 歳	537	405	132
40-49 歳	525	404	121
50-59 歳	511	432	79
60-69 歳	307	257	50
年齢無回答	—	—	—
合計	2,420	1,920	500

なお、喫煙者人口の男女比については「平成 12 年度 国民栄養調査結果」厚生労働省、年齢層別人口については「平成 12 年度 国勢調査抽出速報集計結果」をもとに算出した。

(3) 調査方法

郵送配布・郵送回収

(4) 有効回収数

2,105 件（回収率：87.0%）

年齢	回収数（総数）	回収数（男性）	回収数（女性）	性別無回答	回収率（総数）	回収率（男性）	回収率（女性）
20-29 歳	466	364	102	—	86.3%	86.3%	86.4%
30-39 歳	464	348	116	—	86.4%	85.9%	87.9%
40-49 歳	449	343	106	—	85.5%	84.9%	87.6%
50-59 歳	452	381	70	1	88.5%	88.2%	88.6%
60-69 歳	273	228	45	—	88.9%	88.7%	90.0%
年齢無回答	1	1	—	—	—	—	—
合計	2,105	1,665	439	1	87.0%	86.7%	87.8%

(5) 調査実施期間

2001 年 12 月 28 日～2002 年 1 月 11 日

(6) 集計における検定方法と記述方法

本調査では、有意水準 5%で χ^2 検定を実施し、ハバーマンの残差検定によって各セルにおける期待度数と実測値との調整残差の有意性を検定した。なお、本報告書では、以上の検定で有意差が確認されたものについてのみ言及することとし、報告書内のクロス表においては、本文で言及した数値をゴシック体で表記している。

なお、残差分析に基づいた記述については「統計的に多かった」「統計的に少なかった」の表現を用いた。単純集計の割合についての言及については、「割合が高かった」「割合が少ない」の表現を用いている。

2．調査結果の概要

本調査は、たばこの購入の実態と、たばこの価格の変動に伴う喫煙者の消費行動の変化をみることを目的として実施している。たばこが値上げされた場合には、「たばこをやめる」「本数を減らす」等という喫煙の行動変化が予想されるが、この結果をアンケート調査で確認し、検証すると同時に、行動変容を起こす要因を 1)ニコチン依存度、2)たばこの購入単位、3)現在購入しているたばこの値ごろ感、4)こづかい、5)現在購入しているたばこの価格、6)禁煙への関心度等から分析を行った。以下、明らかになった結果概要をまとめる。

○喫煙期間が長い人ほどカートン買いが多い

喫煙期間「10年未満」「10年以上20年未満」「20年以上」とたばこの購入単位の関係をみたところ、喫煙期間が長いほどカートン買いが多くなり、喫煙期間が短い人ほど1箱買いが多いという購買行動の違いがみられた。

○男性と女性で1箱あたりのたばこの金額に違い

男性は1箱250円のたばこ、女性は1箱260円以上のたばこの購入が多い。これは、女性に人気の銘柄の価格との関係とみることができる。

○こづかい3万円未満層は、現在のたばこの値段も「高い」と感じる

1か月あたりに自由に使い道を決められるお金（こづかい）が「3万円未満」という層は、現在のたばこの価格を「高い」と感じている（60%強）。今後、たばこが値上げされた場合に、影響を大きく受けるのは、この層であると考えられる。

○ニコチン依存度が高くなるほど、現在のたばこの値段を「高い」と感じる

男女年齢別に分けた上で、ニコチン依存度とたばこの値ごろ感の関係をみると、ニコチン依存度が高い層ほど、現在のたばこの価格を「高い」と感じる傾向がみられた。

○ほぼ半数の喫煙者がたばこをやめる価格は300円から500円の間

喫煙者にそれぞれたばこ1箱が「300円」「500円」「1,000円」に値上げした場合に、どのような行動をとるかをたずねた結果、「300 円」でやめるという回答は全体の16.2%、「500円」でやめるという回答は全体の42.2%に達した。ほぼ半数の喫煙者が300円から500円の間で、喫煙をやめることになる。

また、300円から500円の値上げでは、40%弱の人が何らかの形で「本数を減らす」としており、たばこの需要量が減る価格は、300円から500円の間に属することになる。

○たばこ1箱1,000円になると、63.1%の人が喫煙をやめる

さらに、たばこ1箱が1,000円に達すると、63.1%の人がたばこをやめることになる。このことから、過半数の人が禁煙に踏みきる価格とは、500円から1,000円の間にあるとみられる。

○300円までの値上げによる行動の違いは、ニコチン依存度と禁煙への関心

300 円までの値上げでは、「たばこをやめる」という回答の割合は男性より女性で高く、また、ニコチン依存度が低いほど「たばこをやめる」という割合が高くなり、禁煙への関心が高いほど「たばこをやめる」という割合が高くなる。逆に言えば、ニコチン依存度が低い人、禁煙への関心が高い人に対する、300 円までのたばこの値上げは、禁煙対策として効果があると考えられる。

○500円までの値上げによる行動の違いは、禁煙への関心

500 円までの値上げは、300 円までの値上げと同様、禁煙への関心が高い人ほど「たばこをやめる」という回答が多くなる。つまり、500 円までの値上げも、禁煙への関心が高い人には、禁煙対策としての効果が見込める。

○1,000円になってもたばこをやめない人は、禁煙への関心が低い

1,000 円になってもたばこをやめないと回答した、現在の喫煙者（本調査の回答者）の 40%の人は、禁煙への関心が低い。この層にたばこをやめさせるのは、非常に困難であることがわかる。

○喫煙関連疾患の理解度、喫煙の健康への影響認識が高い人は禁煙の関心が高い

禁煙への関心が高い人は、喫煙関連疾患の理解度が高い。また、喫煙の健康への影響認識が高い人ほど禁煙への関心が高く、現在、禁煙に取り組んでいる人が多い。

３．たばこの購買と価格変動に対する喫煙行動の変化

3-1. 分析に用いる軸について

以下の分析では、主に男女年齢別、ニコチン依存度を分析軸として用いている。それぞれの詳細は、別途記述するが、概要は以下の通りである。

(1) 男女年齢別

回答者の性別は、男性が 79.0%（40 歳未満 33.8%、40 歳以上 45.2%）、女性が 20.9%（40 歳未満 10.4%、40 歳以上 10.5%）となっている。なお、平成 11 年度国民栄養調査結果（「国民栄養の現状」）をもとに推計した喫煙者数の構成比率は、男性 81.4%（40 歳未満 35.5%、40 歳以上 45.9%）、女性 18.6%（40 歳未満 9.3%、40 歳以上 9.3%）であるので、回答者の構成比率がほぼ全国の推計喫煙者数の構成比率に比べると、やや男性の割合が低く、女性の割合が高くなっている。

また、回収数を考慮して有意な調査結果を得ることと「第３章　喫煙によるコスト」における算出の際に、喫煙関連疾病等が発現するのを 40 歳以上とみなしたため、ここでも年齢による区分は 40 歳とし、以下のような４カテゴリーに区分し、分析を行うこととした。